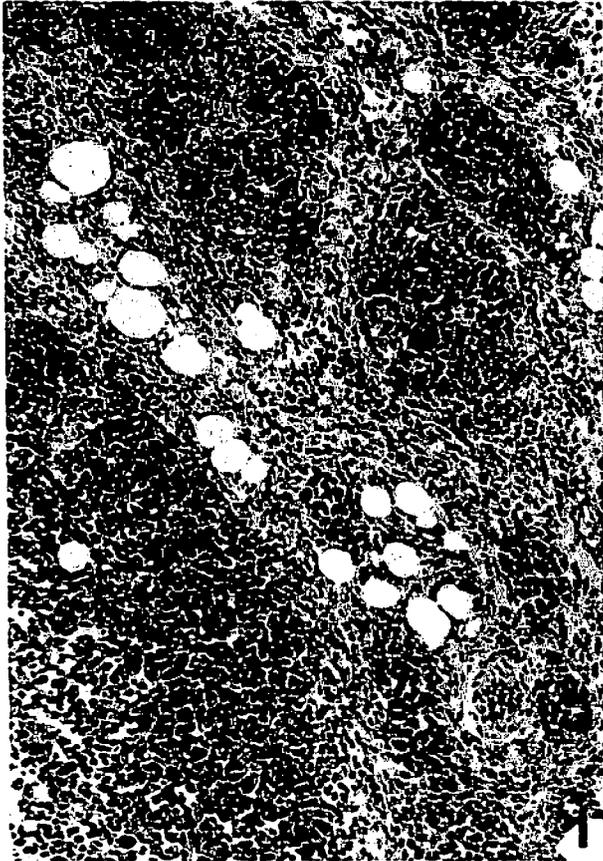


犬の膝関節の新生物

鹿児島大学農学部家畜病理学教室出題 第26回獣医病理学研修会No.450



動物：スピッツ犬，雌，13歳，8.3kg。

臨床的事項：1984年12月11日，左後肢の異常を訴えて来院。膝蓋関節部を圧すると痛み，時々左後肢を挙上した。X線検査で大腿骨骨端部に軽度の骨融解像を認め，肺には気管支肺炎像を認めた。1985年1月23日左後肢負重不能に陥り，3本足歩行。左大腿骨遠位部の骨融解像著明となり，同部より採取した血様液中に単核細胞の有糸分裂像を認めた。2月4日大腿骨遠位部の骨皮質は消失し，骨折を併発。肢骨近位端にも骨融解像を認めた。2月7日に大腿骨中央部より断脚手術。遠位端に血液を混えた汚い液を容する腔所を認め，その壁は新生物よりなると思われたが，関節腔との連絡は無かった。術部はその後治癒したが，肺に転移像と思われる明瞭なX線不透化部を認め，経時的に増大し，肺水腫と心不全を発生して死亡した。剖検は許されず焼却。提出標本は大腿骨遠位端の一部で，燐酸緩衝ホルマリン固定，HE染色。

組織学的所見：骨髓腔から関節軟骨に迫る腫瘍組織の増殖を認め，さらに周囲の軟部組織や関節嚢にまで浸潤がみられた。腫瘍組織は好酸性細胞質の豊富な単核細胞

の多発性巣状増殖からなり(写真1)，巣中心部の壊死，有糸分裂像，多核巨細胞，核内封入体等が認められた(写真2)。肉眼的腔所に面する部分では細胞の変性や遊離，軽度の出血を認めた。一部に核濃縮傾向を示す細胞が腺構造様の配列を呈したが，アルシアン青に染るものはなかった。肢骨近位端の病変も同質の変化を示した。

電顕的観察により，単核の腫瘍細胞は絨毛様の突起を有し，粗面小胞体とミトコンドリアに富み，多核巨細胞もほぼ同質の構造を示すが，前者は粗面小胞体が多く，後者はミトコンドリアが多い傾向を認めた(写真3)。単核の腫瘍細胞が一部密接している像もあるが，明確な接着装置は認められなかった。また，細胞質内にフィラメントやグリコーゲン顆粒の目立つ細胞も無く，核内封入体にはウイルス様構造を認めなかった。以上の所見から腫瘍細胞は骨髓由来の間葉系細胞性特徴を有し，巨細胞も起源を一つにするものと思われた。この腫瘍は多くの点でヒトの骨巨細胞腫の悪性転移型に似ている。

病理組織学的診断：犬の大腿骨遠位端にみられた骨巨細胞腫。